

「伝統」の継承、再創造、移植 —内モンゴル自治区における「白いスウルデ」祭祀の「復興」をめぐる—

ソロンガ

愛知県立大学大学院国際文化研究科博士後期課程

近年、中国内モンゴル自治区において、モンゴル帝国からの伝統祭祀である「白いスウルデ祭祀」が、三か所でそれぞれ独自の形で並行して行われるようになった。一つはモンゴル帝国の軍の直系一族にあたる祭祀集団によって、400年近く受け継がれてきた伝統祭祀である。もう一つは、2006年、モンゴル統一800周年を機に、観光用に「再創造」された祭祀である。この派手な祭祀は、民間の実業家と過去の「白いスウルデ祭祀」を研究してきた学者の共同によって作られたものである。そして、三つ目は最後の大ハーンであるリグダゲン・ハーンの故郷であるチャハルの子孫たちが、そこをモンゴル帝国の正統な中心地であると主張して「移植」して2008年に開始した祭祀である。これらの三つの祭祀は、それぞれが自らの正統性を主張しながら、行われている。

新たな「祭祀」の「復活」の背景には、エスニック・アイデンティティの側面と、経済的利益の側面がある。どちらの祭祀も、観光を通じた利益を求めて復活したが、同時にモンゴル人のエスニック・アイデンティティの活性化をもたらした。そのエスニック・アイデンティティはオルドスとチャハルの二重構造を持つ。国家は、観光を振興しながらも、過剰なエスニック・アイデンティティは抑制しようとする。それが祭祀の復活の活動とエスニック・アイデンティティに影響を与えている。

はじめに

21世紀に入って、中国では、「大きな転換」が進行している。経済発展やグローバル化が進行する今日、特に、2000年以降、「西部大開発」の一環として観光開発が進められることによって、かつての辺境地域（少数民族地域）の状況は一変した。著しい経済発展の中、地域の「伝統文化」が見直され、各地の古き伝統は、商業主義的色彩を帯びつつ、めざましく「復興」した。

「白いスウルデ」とは、紋章と幡を組み合わせたようなもので、モンゴル帝国チンギス・ハーン時代からモンゴルを代表する「国旗」に当たるようなものである。『モンゴル秘史』第202節に、1206年テムジンがオノン河のほとりで「白いスウルデ」をたてて大ハーンの位につき、チンギス・ハーンの称号を与えられたとの記述がある^{注1)}。この祭祀は、モンゴル帝国崩壊後も、モンゴル軍の兵士の直系一族（チャハル・モンゴル人）の祭祀集団によって、内モンゴル自治区^{注2)} オルドス市ウーシン旗^{注3)} において、現在まで代々受け継がれてきた。この伝統的な「白いスウルデ」祭祀の形態とその由来と歴史に関しては、楊海英が古

文書や口承から復原・再構成している¹⁾。

社会主義中国の建国当時から文化大革命が終わるまで、古き伝統は「悪しき習慣」や「迷信」とみなされ、「白いスウルデ」祭祀もそのような過去の因習と否定されて、30年にわたって中断させられることになった。文化大革命の嵐が過ぎたあとに始まった「改革開放」政策によって、国内でのイデオロギー的締め付けが緩んできた1982年頃、その祭祀が再開された。しかし、盛大に行われたとは言い難く、むしろ周囲に知られず密かに行われてきたといつてよい。

ところが、2006年のモンゴル統一800周年を機に、オルドス市ウーシン旗の他の場所で、この伝統的な「白いスウルデ」儀礼とは別に、オルドス・モンゴル人の観光業者による投資と民俗研究者による「古文書の発見」をきっかけに、「白いスウルデ」祭祀が大々的に「復興（再創造）」され、盛大に行われるようになった。

さらに、2008年7月から、オルドス市から遠く離れたところ、モンゴルの都であった元上都（1256年頃建設）を擁するシリングル盟シュルンブフ旗^{注4)}でも、世界遺産登録申請に向けて「伝

統文化」の復興を推進してきた地方政府の役人（チャハル・モンゴル人）のイニシアティブによって、ウーシン旗ムーブラグから「伝統祭祀」が「移植」され、執り行われるようになった。

こうして、内モンゴル自治区で、モンゴル帝国の象徴「白いスウルデ」を祀る祭祀が、それぞれの正統性を主張しながら、三か所で並行して行われることになったのである。それらの祭祀は、その成立の経緯、担い手、特徴がそれぞれ異なり、一方で、相互に影響を与えあっている。

筆者は2006年8月から2010年3月にかけて8回、計8ヶ月の現地調査を行った。本稿では、現地調査に基づき、三か所で平行して開催されている「白いスウルデ」祭祀を比較し、考察する。事例の分析を通じて、現在の中国における「伝統復興」現象の要因、複雑な社会背景を明らかにし、「伝統」の「継承」「再創造」「移植」の重層性とその相互作用、国家の政策との関係、そしてマジョリティとマイノリティの関係などを論じる。

本稿の事例では、「白いスウルデ」祭祀を、次のように三つのタイプとして整理しておきたい。タイプ①は、文化大革命で一時中断したが、モンゴル帝国の公式の祭祀を継承してきた「伝統祭祀」

である。タイプ②は、モンゴル帝国統一800周年を機に、「復興」した新たな祭祀である。これを「再創造祭祀」と呼ぶ。タイプ③はモンゴル帝国の古都の世界遺産登録を目的に「伝統祭祀」を移植した新祭祀である。これを「移植祭祀」と呼んでおく。

「白いスウルデ」祭祀とは

オルドス (ordos) とチャハル (čaqar) の位置づけ

タイプ①「伝統祭祀」の行われている場所は、オルドス市ウーシン旗ナリーンゴル・ソムの南東部ムーブラグで、ほぼ農耕化されたナリーンゴル・ソムの中で、わずかに牧畜を営んでいる地域である。98%以上を占める漢民族の住民に囲まれながら「白いスウルデ」祭祀を守り続けてきた。その主体となってきた祭祀集団は、その地域に多く居住するオルドス・モンゴル人とは異なるチャハル・モンゴル人である。タイプ②「再創造祭祀」はウーシン旗スウルデソム南部タリーンウスに位置する「白いスウルデ」生態観光区で行われ、地域に居住するオルドス・モンゴル人が担い手である。両祭祀地域の間の距離は約50キロである。タイプ

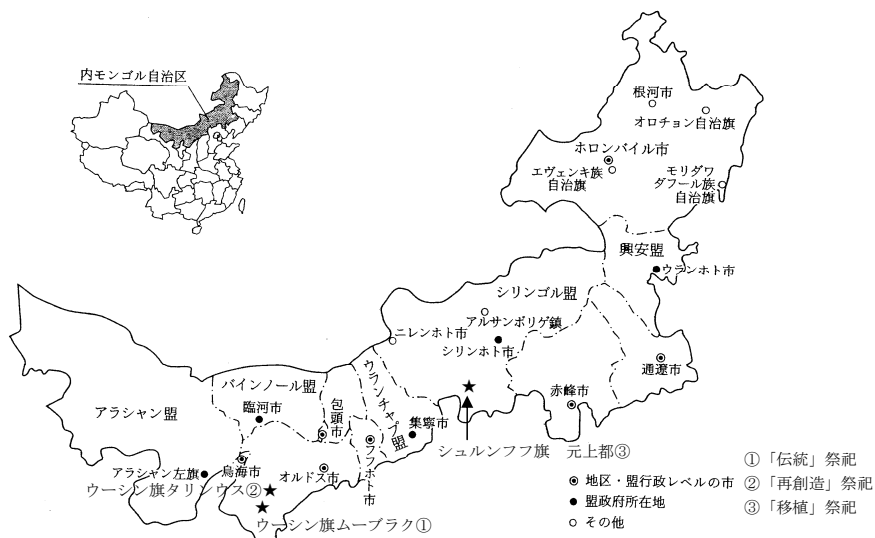


図1 内モンゴル自治区 調査地

③「移植祭祀」は、シリングル盟シュルンフ旗の元上都で行われている（図1参照）。この祭祀の担い手はチャハル・モンゴル人である。

上記のように、祭祀の担い手は、モンゴル人の2つのサブ・グループ：チャハル・モンゴル人とオルドス・モンゴル人である。まずその歴史的由来を述べておきたい。

15世紀に北元^{注5)}のダヤン・ハーンがモンゴル高原の諸部族を統一して6個のトゥメン（万人隊）と呼ばれる大集団に分けた。ダヤン・ハーンは全モンゴルの盟主であり、直轄集団のチャハルを中心に左翼（東部）3トゥメンを率いた。トゥメンは再編を繰り返してきたが、左翼3トゥメンはチャハル（正統ハーン直轄集団）、オリヤンハイ、ハルハ、右翼（西部）3トゥメンは、オルドス、トゥメド、ユンシェーブ（ハラチンとアスド）である^{注6)}。

チャハルは東部から東北（満州）にかけて最大の勢力であり続け、17世紀に入るとリグダグ・ハーンが全モンゴルの支配を復活しようとした。この強権支配を嫌ったホルチン部は満州人の後金と結んで対抗した。その結果、リグダグ・ハーンは戦いに敗れ、新天地を求めて西方へと移動し、内モンゴル中部のハラチン、西部のトゥメドを次々に併合し、黄河の屈曲部に入ってオルドスを屈服させたが、1634年に死去した。

リグダグ・ハーンが亡くなると、その子エジェイは後金との抗戦を断念し、後金のホンタイジに降伏し、清の統制下に入る。モンゴル軍が満州に降伏しチャハルへ撤退する時、「白いスウルデ」が満州軍の手に渡ることを恐れ、トクチ（旗手）の一部の人とその家族、そして満州に帰順したくないチャハル・モンゴル人たちが「白いスウルデ」と共にオルドスに残った。それ以来、400年近くオルドス地方で「白いスウルデ」を祀ってきた。

清朝の統治下の盟旗制^{注7)}のもと、チャハルは8旗で一つのシリングル盟となった。オルドスは7旗で一つの伊克昭盟（イエケ・ジョー盟）となり、イエケ・ジョー盟は2002年に盟から地方級都市に変更され、オルドス市となって現在に至っている。

「白いスウルデ」と「伝統祭祀」の継承

モンゴル語で「スウルデ（sülde）」というのは、直訳すると「剣」の意味であり、オルドス地方で

は、モンゴル人は古くから「トゥグ（旗）（туγ）」と「スウルデ」を同等なものとして理解し、祭ってきた。そのため、「スウルデ」には「旗・剣」という意味合いがある^{注8)}。

「白いスウルデ」は、真ん中に大きなスウルデ、両側に小さいスウルデと槍が立てられている（写真1参照）。中心の大きなスウルデの形は、竿の先に鉄製の三叉をつけ、下には木製の円盤がある。円盤の直径は1尺で、厚さは1寸である。円盤の外側に白い雄馬の鬣を巻いてある。中心のスウルデの高さは13尺で、両側の「スウルデ」と槍（jida）の高さはそれぞれ9尺である。「13」と「9」はモンゴル人における聖数である。

「白いスウルデ」祭祀の担い手は、帝国時代はモンゴル軍の兵士のトクチ（旗手）であったが、帝国崩壊後はオルドス地方に居残った子孫が儀礼を受け継いできた。その過程で、祭祀の形態も変化してきた。帝国時代に受けた特別な恩賜がなくなり、祭祀の運営と継続に困難が生じたチャハル・モンゴル人は、同じチャハル・モンゴル人の家々を巡回して、援助を求め、それによってかろうじて祭祀を続けていた。こうした状況下で、本物のスウルデはあまりに大きいため、持ち運びに不便だということで、同じ形の小型のスウルデを巡回用に作り、本物に守衛として槍一本を備え付けて、今日の大小のスウルデと槍というセットになった。

清朝の時代に入ってから、「白いスウルデ」祭祀が、国家儀式から祖先祭祀に変わった。モンゴル帝国が崩壊したのに、帝国のシンボルである「白いスウルデ」を祭ることは、清朝に対する反逆とみなされる可能性があり、いかにも危険だと考えられた。そのために、スウルデには祖先の魂が宿っており、守護神であるという意味合いを表に出して祭るようになったと考えられる。モンゴル人の主な信仰対象は天の父、地の母、祖先の霊の三つであるが、現在、オルドスの「伝統祭祀」の「白いスウルデ」には、祖先チンギス・ハーンの霊が宿っていると認識されている。

「白いスウルデ」の祭祀に携わる人たちは、それぞれ祭祀の重要な役命を担っている。エルヘセチン（2005）によると、ウーシン旗に残留したチャハル・モンゴル人のオボグ（父系クラン）すなわち父系出自集団は20近くある²⁾。

チャハル・モンゴル人は族譜を「文化大革命」が始まる前まで持っていて、祭祀の道具、文書などを決まった場所で保管していたが、「文化大革命」当時に焼かれ、現在はほとんど失われた。エルヘセチンは19年かけて調査し、統計をとり、2005年に、『*Čayan sülde kiged tegün-ü dayagsad*』（「白いスウルデ」とその祭祀者）を出版した。その中では、チャハル・モンゴル人の100世帯以上の家族の名簿を挙げている²⁾。

タイプ①「伝統祭祀」

「白いスウルデ」の継承と祭祀者

「白いスウルデ」の祭祀に携わる人たちは、総じてトクチと呼ばれる。祭祀者は、本来は、上述のように20近くの父系クランからなっていた。現在これらのクランの名は使われなくなり、ほとんどがその祭祀職務名をクランの代わりに使っている。その職務名が代々受け継がれている。

実際に祭祀に携わる人は、トクチ (*tuγči*)、シルビチ (*silbiči*)、バグシ (*baγsi*)、ホルチ (*qorči*)、ウーラガチ (*urγači*)、イルガーチン (*yarγačın*)、シレーチン (*siregečın*) の7人である。トクチは、普段から「白いスウルデ」に香をあげ、祭壇の清掃、祭祀用品の管理、調達をする。シルビチは儀礼の時、「白いスウルデ」の「九脚」を演じる。バグシはテキストを読む人で、文字を読める人が任じられる。ホルチは「白いスウルデ」を守る武人である。ウーラガチは祭祀用の羊を馬捕り竿で

捕える。「白いスウルデ」祭祀において、祭祀に使用する羊は手で捕まえることは禁じられており、すべて馬捕り竿で捕獲する。イルガーチンは祭祀用の羊を屠殺し、解体する。シレーチンは祭祀用の羊を料理する。

現在祭祀に携わっている人は、文革前にそれぞれの役を分担していた祭祀者の子息である人が多い。このほかに、祭祀に欠かせない参拝者は、近所に住んでいるチャハル・モンゴル人である。オルドス地方に居残ってから、互いに助け合い、「白いスウルデ」を守り、祭ってきた人々である。

祭祀期日と祭祀の過程

「白いスウルデ」祭祀は、年に5回大きな祭祀がある⁹⁾。それ以外に、毎月3日にトクチが小規模な儀礼を行う。ここで西暦2007年8月15日（オルドス暦10月3日）の祭祀を調査した観察結果を次にまとめる。

儀礼に使われている祈祷文（テキスト）はそれぞれ「サン」(*sang*)、「ウチェグ」(*učig*)、「ダータガル」(*dayadqal*)、「ユールル」(*irügel*)と分けられている¹⁰⁾。以下では、すべてを「経文」と呼ぶことにする。

早朝から、チャハル・モンゴル人が集まり、供物とハダグ (*qadag*)¹¹⁾を「白いスウルデ」に捧げ、参拝する。バグシはスウルデにサン（香）をあげ、経文を読む。これと同時に、ウーラガチが儀礼用の羊を捕まえてきて、バグシに経文を読



写真1 「伝統祭祀」で祭られている白いスウルデ



写真2 参拝者（男性のみ）がバグシと一緒にテキストを読んでいる「伝統祭祀」の様子

んでもらって羊を清める。

その次に、イルガーチンが羊を屠殺し、解体する。シレーチンは、祭祀用羊を料理し、集まった人たちに食事を出す。トクチが儀礼を行う。祭祀用の羊は少なくとも2頭は必要で、事前に用意する。ほかは、当日祭祀者が持ってくる供物である。それらを参拝者に振舞って、残りは全員に分配する（写真2参照）。

祭祀用の羊の解体には規則がある。羊の右の2本の足は解体せずそのまま残す。内臓はつないだままに茹でて儀式に使う。それらは、血をきれいにとってから、土に埋める。

昔は、祭壇の近くに穴を掘って、かまどを造り、料理し終わると元に戻す習慣があった。数年前からは、レンガのかまどを造り、調理用の道具を保管する倉庫も設けた。

「伝統祭祀」ではオボー（obuy-a）^{注12} 祭祀は儀式の中に入っていない。近くにオボーがあるが、祭祀が別々に行われている。次に述べる「再創造祭祀」では、オボー祭祀が含まれる。

このほか、祭祀の準備中、集まった人々は小規模なナーダムをやる。ナーダムはモンゴルの伝統的な祭りで、一般に相撲、弓、競馬が行われるが、ムーブラグ周辺は樹木が多く、広い場所がないため、相撲と弓だけを行っている。その賞品は供物の中から出す。

タイプ②「再創造祭祀」

国家による大開発と「古文書の発見」

2000年から、中国は内陸部の12の地域^{注13}で「西部大開発」を実施し、西部地区の経済成長を推進してきた。これによって、内モンゴル自治区は高度成長の時期に入った。2002年から2008年まで内モンゴルの経済成長速度は7年間連続で中国全土のトップに立ち、2008年、内モンゴル自治区のGDPは7700億元（日本円約10兆円）で、2001年の2倍になった。

オルドス市はこの西部大開発プロジェクトの中で、もっとも著しく成長を遂げた地域である。オルドス市は人口わずか150万人で、人口の多い中国では小さな地方都市に過ぎない。しかし中国全土における天然ガス埋蔵量の三分の一、石炭埋蔵量六分の一を占める豊富な地下資源が巨額な投資を集めている。2008年には、一人当たりのGDP

が上海市を追い抜いたと言われている。オルドス市一人当たりのGDPが10万2,128元（約134万円）に対し、上海市の一人当たりのGDPは7万3,124元（約96万円）である^{注14}。

「西部大開発」の実施により、観光事業において文化をあまり強調しなかった政府が方針を変更した。ウーシン旗では、「旅行・文化大旗」を目指そうというスローガンを出し、伝統文化に力を入れ、「ウーシン旗文化促進協会」を設立して、政府が伝統文化に対して強力な宣伝をしはじめた。

そもそもオルドスはモンゴル語で「宮殿（ordon）」を意味していて、チンギス・ハーン生前の宮廷をチンギス・ハーンの霊廟として奉祀していることに由来していると言われている。モンゴルの祭祀文化が多く残されている地域でもある。

このような背景の中で、2005年4月に、モンゴル人実業家が、政府の許可を得て「白いスウルデ生態旅行会社」を設立した。草原で広い面積の土地を買い取り、そこに、「白いスウルデ」生態旅行区（観光スポット）を建設し、祭祀を行う宮殿、広場、そしてオボー、競馬場などを造った。この実業家とは別に、一人の学者も「白いスウルデ」祭祀の復活を試みようとしていた。彼の名前はガルディノルブと言い、20年間「白いスウルデ」の研究を続けてきた。彼が1986年に行った調査中に、牧民の家から大量の「白いスウルデ」の古い文献を発見したという³⁾。

2006年モンゴル統一800周年を機に、実業家が学者に伝統文化による観光開発の話を持ちかけ、メンバーを集めて、「白いスウルデ祭祀管理協会」を立ち上げ、彼らは伝統儀礼と文献を参照しながら、「白いスウルデ」を新たに解釈し、盛大に「復活」させた。「伝統祭祀」とは別に、観光業者によって、新たな「白いスウルデ」祭祀が、政府の文化・観光開発に沿った形で大規模に創造されたのである。2006年7月、ウーシン旗が、中国文学芸術連合会、中国民間文化協会の審査によって「中国オルドス・スウルデ文化の里」と命名された。

この「再創造祭祀」に関わる人々は投資家、学者、「白いスウルデ」管理協会の会員、出演者、参拝者など地域の人々及び観光客である（写真3



写真3 騎馬隊の広場での儀式



写真4 「再創造祭祀」で祭られている白いスウルデ（宮殿の中で）



写真5 宮殿へ白いスウルデを移動させる儀式



写真6 元上都遺跡の航空写真（元上都管理会 提供）



写真7 「移植祭祀」で祭られている白いスウルデ

参照)。実業家は実際の儀礼には携わらないが、行政関係、有名人との交流に関与している。学者は祭祀の実施を指導する「白いスウルデ」管理協会の会員でもある。会員は祭祀の準備、実施をする人で、メンバーは10人ぐらいである。主に経文を読み、儀礼の進行を行うバグシの職を勤めている。

「再創造祭祀」には、祭祀当日に、色々な役を演じる出演者がいる。彼らは、近隣に住む牧民が多い。騎馬隊、ウーラガチ、イルガーチンの役を演じ、役割ごとに統一された派手な衣装を身にまとう(写真4参照)。多い時は何百人もいる。「伝統祭祀」と違って、女性も祭祀の準備仕事を手伝う。このほかに、参拝者と国内外の観光客が大勢集まる。初回2006年8月の祭祀には、2日間で約6万人が訪れたと報道されている。

「再創造祭祀」の白いスウルデ 変化する「復活」

「再創造祭祀」の白いスウルデは、形としては「伝統祭祀」に用いる白いスウルデと同じである。三本とも同じ形で、真ん中の一本は長さ13尺、両側の二本は9尺である。異なる点として、貴金属が多く使われ、三叉の先の宇宙をイメージしている九星が宝石でできている(写真5参照)。また、その下の円盤に「9999本の白い雄馬の鬣」を巻くなど数字の「9」に多くこだわっている^{注15)}。それは「伝統祭祀」のほうには見られない特徴である。

祭祀は、年に四回、以下のような大きな祭祀がある。旧暦正月3日、オルドス暦8月3日(旧暦5月)、オルドス暦10月3日(旧暦7月)、オルドス暦ホビサラ3日(旧暦10月)に行う^{注16)}。

「再創造祭祀」は、年に4回行われることになっているが、状況によって変えられた。2007年には、内モンゴル自治区成立60周年記念イベントに向けて、テレビ番組収録のため7月25日に一回多く行った。祭祀内容は2006年より一つ多く、「聖樹」の祭祀が増えた。

博物館、ツーリングコースなどの工事が終わると、祭祀場は1,000円程度の入場料をとるようになった。そのため、来場者数は最初の2006年の夏季祭祀には、二日間で約6万人になったが、2007年は3万人弱に減った。そこで、地域の参加者が減少していくのを心配して、主催者側は、

祭祀当日は無料で入場できるようにした。

「再創造祭祀」が開催されて以来、ウーシン旗政府も力を入れて、2010年春「白いスウルデ」生態旅行会社と共催で「白いスウルデ生態旅行観光区」に「スウルデ文化博物館」をオープンした。ここには、モンゴルに伝わってきた「白いスウルデ(čayan sülde)」、「黒いスウルデ(qar-a sülde)」、「アラグ・スルウデ(alay sülde)」、「まだらなスウルデ」を展示し、ムーブラグで行われている「伝統祭祀」と当主催者側が携わっている「再創造祭祀」が同じくこの地域の「伝統」だと主張されている。「再創造祭祀」は700年前のモンゴル帝国時代からオルドスに伝えられてきた「白いスウルデ」を祭っており、一方、「伝統祭祀」のほうで祭っている「白いスウルデ」は北元の「白いスウルデ」と見なされている。

タイプ③「移植祭祀」

祭祀の「移植」の経緯

開催地シリンゴル(錫林郭勒)盟シュルンフフ(正镶藍)旗^{注17)}には、元上都遺跡が残されている。これは元のフビライ・ハーンが設けた都で、北京からは北へ275キロに位置し、夏の都として使われていた(写真6参照)。

シュルンフフ旗での「伝統祭祀」の「移植」の経緯は次のようである。旗政府が元上都遺跡の世界遺産登録を目指すことになり、旗の役人たちが「白いスウルデ」について様々な歴史文献調査をして、「白いスウルデ」祭祀がモンゴル宮廷文化に欠かせないものであったと認識した。さらに、オルドス市ウーシン旗にて「伝統祭祀」が存続していることを知り、現地を視察した。主催者との交渉、行政間の話し合いを経て、オルドスで400年間近くチャハル・モンゴル人が守ってきた「白いスウルデ」祭祀をシュルンフフ旗に持ってくることにした。

2008年から、行政の役人を中心に、祭祀文化の継承のためウーシン旗へ足を運んで、「白いスウルデ」に関する調査、勉強を重ね、7月からシュルンフフ旗で「白いスウルデ」を祀り始めた。その中心的な人物は、副旗長、人民政治協商会議(政協)副主席と文化局の局長である。

歴史文献からみると、オルドスに「白いスウルデ」が持って来られる前、すなわち400年前は、

チャハルで祭られて（立てられて）いた。元上都に「白いスウルデ」祭祀を「移植」することは、モンゴルの正統な歴史と伝統の継承になる、と解釈がされている。

祭祀の内容

祭祀は2008年7月から始まった。儀式の進行と祭祀内容はウーシン旗のエルヘセチンの著書に基づいて行われている²⁾。が、まだウーシン旗のように年に5回開催することができずに、夏と冬にだけ行われている。政協副主席への聞取りによると、組織が軌道に乗っていないことが大きく影響している。祭祀自体が地元の牧民にとってはじめての経験であって、特に経文を読める人が少なく、人手が足りないなどのためである。それでも、初回の祭祀に、周辺に住む牧民、チャハル・モンゴル人と一般客が多く参加し、祭祀場に向かう道に参拝者の車が10キロ以上長い列を作った。

現在、祭祀管理会の一員であるバヤラト氏が祭祀を進行している。バヤラト氏はシュルンフ旗の牧民である。最初に、ウーシン旗へ祭祀を視察に行ったメンバーの一員である。牧民のなかでも高い教育を受け、祭祀に興味を持っていたため、代表に選ばれ、祭祀の日は進行役を担当している。

ここで祭っている「白いスウルデ」の形は、ウーシン旗ムーブラグの「伝統祭祀」で祭っている「白いスウルデ」と同じである。ムーブラグから、中心の「白いスウルデ」に巻いている馬の「たてがみ」（鬃）を数十本取ってきて、新しい「白いスウルデ」に巻いた（写真7参照）。

考察

3つの祭祀の比較

三つの祭祀を比較するが、それぞれの特徴について、まず表1に示す。

まずタイプ①「伝統祭祀」とタイプ②「再創造祭祀」を対比してみたい。祭祀内容からみると、「伝統祭祀」は本来、チンギス・ハーンを祭る祭祀であるが、清朝以後、また、社会主義中国建国後は、守護神・祖先祭祀の特徴をも帯びてきた。祭祀者はチャハル出自の人たちで、服装は自由であり、携わる人が少なく、各職務を一人ずつで行っている。参加者も200から300人と少数である。一方、「再創造祭祀」では、テンゲル（天）を祀る。「白

いスウルデ祭祀管理協会」の会員を中心として運営し、役割によって決められた衣装を身につけた人々が何百人も動員される。そして、地域のオルドス・モンゴル人、さらに、多くの観光客が何万人単位で多数参加する。

「再創造祭祀」では、儀礼内容は大いに数字の「9」にこだわって、統一されている。一方、「伝統祭祀」には、そうした統一性が見られない。「伝統祭祀」はあくまでも参拝者の供物と出し合った資金で成り立っているが、「再創造祭祀」はスポンサーがついており、建設に大きな力をいれ、エンターテインメント性を求める儀式、観光用祭祀になっている。

「再創造祭祀」の開始前、「伝統祭祀」の主催者のもとに、投資家から何度も「協力要請」があったが、チャハル・モンゴル人の祭祀者たちは、「白いスウルデ」に祖先の魂が宿っていると崇拝し、祭ってきたため、祭祀の観光開発に賛成しなかったという。そこで投資家が学者に話を持ちかけた。政府の政策の方針にも合い、観光開発の許可を得て、投資家と学者により祭祀の「復活」が行われた。いわば、文化的な「復興」による経済的実利を目的とした営為であろう。

政策的背景として、ウーシン旗政府は観光開発の重点を「伝統文化」に置いて、「文化観光」促進プロジェクトを実施していることがあげられる。今まで、政府は民間祭祀の拡大を望まなかったが、方針を変えて文化資源を経済資源に転換させることを目指している。その政策の下で、2006年はモンゴル統一800周年という特別な年であり、世界中で記念イベントが開かれ、モンゴルについて注目が高まっていることを契機に、「再創造祭祀」は順調にスタートできた。

ウーシン旗政府の関与についてみると、「伝統祭祀」のほうには役人は全く顔を出していない。「再創造祭祀」のほうには、最初の2006年8月の祭祀では、中央政府の臨時命令により地方政府の参加が止められたが、2007年正月の祭祀には党の幹部ら（漢民族出身が多い）、関係者が全員参加した。また、2007年の夏のナーダム授賞式にも政府関係者が参加した。その後も毎年のナーダムの開会式には欠かさず出席してきた。

この大規模な「再創造祭祀」開催に対して、「伝統祭祀」は反対の立場を取り、自らの「正統性」

表1 三つの祭祀の比較

タイプ	タイプ①	タイプ②	タイプ③
祭祀	「伝統祭祀」	「再創造祭祀」	「移植祭祀」
主催者	祭祀集団（チャハル・モンゴル人）	「白いスウルデ」生態旅行会社	政府の役人（モンゴル人）
主催者の特徴	オルドスに居残ったチャハル・モンゴル人の子孫	モンゴル人投資家、民俗学者	政府トップとの仲介役のチャハル・モンゴル人役人
主催・祭祀者のエスニック・グループ	チャハル・モンゴル人	オルドス・モンゴル人	チャハル・モンゴル人、地域のモンゴル人
参拝・見学者人数	数百人	数万人	数百～2万人
参拝・見学者のエスニック・グループ	チャハル・モンゴル人	オルドス・モンゴル人、観光客（漢人、モンゴル人、ほか）	チャハル・モンゴル人、地域のモンゴル人、観光客（漢人、モンゴル人、ほか）
祭祀対象	祖先祭祀、守護神	天（テンゲル）	祖先祭祀、守護神
イベント目的	祖先祭祀、伝統継承	観光	観光、伝統継承
きっかけ	文革後国策の緩和	モンゴル統一800周年	世界遺産登録申請
資金負担	参拝者の寄付、供物	投資会社、入場料収入など	地方政府負担
正統性の主張	祖先から継承	古文書によるモンゴル帝国伝統の復活	都（元上都）：チャハル正統的な中心地

を主張しながらも、「伝統祭祀」の方も、「再創造祭祀」の影響を受け、祭祀場を近代的に整備するなど少しずつ変わってきている。また、「再創造祭祀」が開催されてから、マスメディアに多く取り上げられるようになったが、メディアはこの二つの祭祀を同じ「白いスウルデ」祭祀の二形態と扱うようになってきた。そのため、「伝統祭祀」も知られてきて、両祭祀が広く知られるようになった。

マスメディアの影響もあって、「白いスウルデ」祭祀の老家であると主張するチャハル地域で、新しい動きが出てきた。それがタイプ③「移植祭祀」である。2008年から、シュルンフフ旗行政の役人を中心に、ウーシン旗へ足を運んで、「伝統祭祀」と「再創造祭祀」を見学し、「白いスウルデ」に関する調査を重ねた。その結果、彼らは「伝統祭祀」を自分たちの祖先が代々受け継いできた伝統だと判断し、その年の7月にウーシン旗から祭祀者を招き、シリングル盟元上都遺跡の前で最初の

祭祀を執り行った。

シュルンフフ旗には、かつてモンゴルの都であった元上都遺跡があり、昔から宮廷に関わる文化が盛んで、独特な文化がその地域に根付いていたが、しかし、今残るものはわずかになっていた。建国後、漢民族の入植により、元上都遺跡の城壁の内側に大量の農民が住み着いて、遺跡が大きな破壊を受けている。そこで、数年前から地域文化を復活させるため、地元政府が力を入れて、文化保護協会を立ち上げ、さらに、世界文化遺産登録を申請する事業を始めた。これに向けて、「白いスウルデ」が、宮廷文化に欠かせないと認識するようになった。

ここシュルンフフ旗の「移植祭祀」では、ウーシン旗の「再創造祭祀」の場合と異なり、資金負担は政府が全額負担している。無論、シュルンフフ旗政府も、3人の役人の要望にすぐに応じたわけではない。3人が政府側を強く説得することにより、資金援助と祭祀の「移植」に賛同を得、祭

祀が開始された。この3人ともチャハル・モンゴル人で、もともと文化に深い興味、愛着を持っていた人々である。

伝統文化の再編とエスニック・アイデンティティ、政策、開発

「伝統祭祀」を継承してきたチャハル・モンゴル人は、周辺の漢民族、そしてオルドス・モンゴル人の中で、祭祀継承によって独自のアイデンティティも受け継いできた。そこに登場した二つの新たな祭祀は、国家の観光推進政策の下で、マスメディアの注目を浴び、観光客、地域の人々の関心を引いた。二つの新たな「祭祀」は、「伝統祭祀」を模倣しながらもそれを再解釈している。特に、タイプ②の「再創造祭祀」は多くの新たな解釈を入れている。観光開発の中で、内モンゴル特有の「文化資本」となったチンギス・ハーンに由来する伝統を社会環境に合わせて新たに打ち出そうと戦略を練ってきた。一方、タイプ③の「移植祭祀」は、オルドスで今日まで伝えられてきた「伝統祭祀」の本家はチャハルであるという歴史的正当性を自覚し、この伝統をチャハルの本拠地で継承するべきだと認識し、伝統の「移植」を試みた。

山下晋司が述べるように、二つの新たな「祭祀」は、無意識の習慣であることをやめ、観光というコンテクストのなかで客体化され、操作され、消費されている^{4,5)}。

それでは、新たな「白いスウルデ」祭祀は、モンゴル人にどのような影響を与えただろうか。タイプ②「再創造祭祀」は、オルドス・モンゴル人に、伝統への愛着を引き起こし、アイデンティティの再確認をもたらした。数万人という参加者がそれを物語っている。タイプ③「移植祭祀」については、何百年間も姿を消していた「白いスウルデ」を再び元上都遺跡の前に立てることは「歴史的行事」であり、これがチャハル・モンゴル人のアイデンティティ強化に繋がることはもちろん、地域のモンゴル人全体にもアイデンティティの再強化をもたらしている。それは、新たな2つの祭祀に共通することである。観光的色彩を帯びながらも、大規模な「祭祀」の「復興」は、内モンゴル自治区の中で、表面的には主体であると言われながら、現実には地域的にもマイノリティとなったモンゴ

ル人の中で抑えられていた潜在的エスニック・アイデンティティを目覚めさせることになった。

これまで、中国政府は、民間祭祀が大規模に行われて大きな注目を浴びることを好まなかった。「再創造祭祀」が「復興」された当初、中央政府が監視したり、地元政府関係の幹部の出席を禁止するなど指令を出したりしたのはそのためである。しかし、2006年はモンゴル統一800周年という特別な年で、世界的に注目されたことを機に、「再創造祭祀」は定着した。2007年からは、党の幹部らも参加が許されるようになり、夏のナードムの授賞式にも政府関係者が参加するようになってきた。

「移植祭祀」の場合も、中心になって動いている3人のチャハル・モンゴル人の役人が、旗政府のトップである漢人の役人を巧妙に説得して、「白いスウルデ」を元上都に持ってきて祭ることが可能になった。

二つの新たな「祭祀」は、地方政府及び中央政府に対して、いかに「白いスウルデ」祭祀の意義をアピールするかという問題意識では共通しているが、それぞれの政府の関わり方には相違点がある。タイプ②の「再創造祭祀」の場合、ウーシン旗政府の働きによって、2006年7月に、「中国オルドス白いスウルデ文化の里」と命名されることを勝ち取った。それによって、「白いスウルデ生態旅行区」が「白いスウルデ文化保護基地」とされ、さらに「白いスウルデ文化研究センター」も設立された。さらに、2010年春、「白いスウルデ文化博物館」がオープンした。ここは主催者の「白いスウルデ」に対する新しい解釈、意味合いを発信する場、つまり多様な「白いスウルデ」文化が存在し、どれもオルドスに古くから伝えられてきた伝統であることを発信する場になっている。同時にまた、行政の対応、狙いを反映する場であり、外に対して文化継承・保護のアピールの場になっている。

タイプ③の「移植祭祀」の場合、地方政府が同じく観光開発という方針に沿って地域の活性化を図ろうとする狙いはタイプ②と共通しているが、ここでは、行政の関係者が、一番トップにいる漢族の官僚とその下の各分野で働くモンゴル出身の役人の二重構造になっている。このモンゴル人の役人たちがトップ官僚と民衆の間を繋ぐ役割を果

たしており、行政のトップに対しては宮殿文化である「白いスウルデ」文化はチャハルにあるべきだということ、歴史の空白を埋め伝統の継承をすることの重要性を訴える同時に、モンゴル人民衆には自文化への意識を高めるよう促してきた。

最後に、この伝統の「復活」を後押している大きな要因である国家政策「西部大開発」について分析してみたい。西部地区は「地大物博（面積が広く資源が豊富）」であり、エネルギー資源や観光資源に恵まれており、また少数民族の中には、周辺国との国境に跨って居住する民族も数多く、近隣諸国への経済波及効果も見込まれている。実際に「西部大開発」政策が実施されて10年になるが、西部地域には高度の経済発展がもたらされた半面、環境破壊、所得の格差など色々な負の成果ももたらされたのも明らかである。三つの調査地がある内モンゴルオールドス市とシリントグ盟でも、鉱山開発、ガス田開発などによる大きな環境破壊問題を抱えている。

その中で、観光事業は文化性の高い「無煙工業」として評価されており、自然環境や風俗習慣の「保護」との「調和」が期待できることから、観光開発に将来性が注目されてきた。事例からわかるように、ウーシン旗、シュルンフフ旗政府、さらに中央政府も「白いスウルデ」祭祀の「再創造」「移植」に賛成し、バックアップしているのはこのためである。

おわりに

「伝統復興」現象は、移民社会を中心に「ニュー・エスニシティ」と呼ばれる視点から研究が進められ、「伝統復興」という現象は、「原初的な愛着」⁶⁾と呼ばれるエスニック・アイデンティティの側面と、「用具論」⁷⁾と呼ばれる経済的利益の側面から捉えられてきた。現在中国各地で起こっている現象も、その枠組みからも捉えることができる。

ホブズボウムが論じるように、近代における伝統文化の「継承」の多くが新たな「伝統の創造」であると捉える考え方もある⁸⁾。「伝統の創造」といっても、そこには共同体の連続性や伝統文化の継承という面がなければ、全く新たな文化の「構築」ということになる。人々の間でその「復活」や「創造」がその集団によって認知された過去と一致し、共感を得て受容され、ひとつの文化とし

て繋がっているとみなされうるものが、「伝統」の前提である。内モンゴルの二つの新たな祭祀がモンゴル人に受け入れられた要因には、そのような背景があるだろう。

ただし、中国社会の場合は、国家の政策との関わりが重要であり、コミュニティの外部に位置する国、政府のエスニック政策を考慮に入れないと理解できない。国のエスニック政策が介入することによって、エスニシティの意識も複雑化しているというのが実情である。

既に述べたように、新たな「祭祀」の成立には、中央政府の基本政策、そして漢民族が多数派を占める地域社会においてもマイノリティの立場にある当事者と地方政府（漢民族がトップを多く占める）との間の関係性、また、地域の内的なアイデンティティ主体の重層性ともかかわっている。そこには、少数民族出身者の自らの民族的アイデンティティへのこだわりと誇り、そして流入してきた多数派漢民族に対する反発、そして国民統合への抵抗などの想いが複雑に絡み合っている。

中央政府のこれら伝統文化「復興」への関与の在り方から見ると、観光振興政策による促進の半面、限度を越えないように監視をしている。多民族社会中国において全民族の国民化を目指す中央政府にとっては、伝統文化の再生は、両義的なものにならざるを得ない。一面では、それを観光資源として役立て、また政府としても少数民族の文化を保護している姿勢をアピールするために役立てたいが、その反面、伝統文化の再生があまりに進むと、もともとの民族の独自性が強調されることになり、国民の統一を阻害する恐れが出る。つまり、各民族のエスニック・アイデンティティの台頭と国家統合のネイションとの相克が現れてきているのである。

謝辞

本研究のフィールドワークは、2007年度盛田財団助成によって実施することができた。フィールドワークでは、エルヘセチン氏をはじめ、それぞれお名前を挙げることはできないが、多くの方々のお世話になった。本稿の執筆にあたっては、指導教員の稲村哲也先生に大変お世話になった。ここに、衷心より謝意を表したい。

注

- 1) 『モンゴル秘史』は、エルデンタイとアルダシャブが註釈し、1986年に内蒙古教育出版社から出版されたものを引用した。モンゴル各部の方言はもちろん、トルコ語やダウール語、満洲語についても豊富な知識を持つ両氏の注釈が、数多い『モンゴル秘史』の訳注書類のなかでも、最も適切だと言われている。⁹⁾
- 2) 内モンゴル自治区は省レベルの行政権を持ち、下位行政単位として7の市と5の盟が設けられている。その下位単位には旗と県があり、その下位単位には蘇木（ソム）と郷がある。
- 3) オルドス市ウーシン旗は内モンゴル自治区の西南部に位置し、総面積は11,645平方キロ、県レベルの行政権を持つ。人口は約10万人（2007年）、モンゴル人が約11%を占める。
- 4) シュルンフフ旗は、3鎮、8ソムを管轄し、牧畜が主な産業であるが、大規模な国营農場も有する。面積10,182平方キロ、人口約8.3万人（2007年）で、漢人の数が6割、モンゴル人が4割を占める。
- 5) 北元（ほくげん）は、1368年に、元の第14代大ハーンのトゴン・テムル・ハーン（在位：1333年－1370年）が長江流域に興った明の北伐を逃れて、大都（現在の北京）からモンゴル高原に撤退した後の元（モンゴル帝国）についての後世の呼び方である。北元の当事者たちは、自分たちは依然として元（大元）として自覚していた。
- 6) モンゴル語の「バルーン」は右・西を意味し、「ズーン」は左・東を意味する。モンゴル人は南の方向を向いて、東西を決める。そのため、右翼と左翼が地図上の位置と逆になる。
- 7) 盟旗制度（めいきせいど）とは、清朝政府がモンゴル諸部を征服した後に、モンゴルの伝統的政治体制と所属関係を取り消して創立した行政制度。基本的な行政機関は旗（ホシュー）である。いくつかの旗の上に一つの盟（アイマク）を設置する。
- 8) エルヘセチンによると、ウーシン旗の「白いトゥグ」は、まさにチンキス・ハーンが大ハーンの位についた時にたてた国旗たる「白いトゥグ」か、もしくはその「直系変種」であろうと結論づけている²⁾。サインジャラガルは、エルヘセチンの調査報告を参照しながら、自らの調査資料も加え、「白いスウルデ」はモンゴル帝国の国旗であったと位置づけている¹⁰⁾。
- 9) 旧暦正月3日、オルドス暦8月3日（旧暦5月）、オルドス暦9月3日（旧暦6月）、オルドス暦10月3日（旧暦7月）、オルドス暦ホビサラ3日（旧暦10月）に行う。
- 10) それぞれ、「儀礼用の絹ニンダルの祈祷」、「灯明の祈祷」、「清めの祝詞」、「聖典」、「羊を清める祝詞」、「大白いスウルデの献香」、「ナムダグの献香」、「聖主ボッダの献香」、「ヒーモリの献香」、「白いスウルデ献香の祭祀」、「ウトウグジュルド捧げる祈祷」、「御酒を捧げる祈祷」、「聖なるチンギス・ハーンの大白いスウルデの祭祀」など計13種ある²⁾。
- 11) 挨拶、儀式などで目上の人や神様への献上の際に用いられ、敬意を表わすものとされる細長い絹。青色または白色が多い。
- 12) モンゴル人は、丘の上に石などを積み上げて塚を作り、その前に供え物をして、父神の天に祈り、母神の大地に拝する信仰がある。この塚のことを「オボー」と呼ぶ。
- 13) 中国の「西部地域」には甘肅省、貴州省、寧夏回族自治区、青海省、陝西省、四川省、雲南省、重慶市、チベット自治区、新疆ウイグル自治区、内モンゴル自治区及び広西チワン族自治区の12省市区が含まれる。
- 14) 「砂漠経済の最前線を行く（1）—内モンゴル自治区・オルドス市」http://www.excite.co.jp/News/china/20080704/Recordchina_20080704016.html（2008年7月4日掲載）による
- 15) 学者ガルディノルブは、「9」の意味を次のように説明している。数字の中で一番大きい数で、縁起がいい。モンゴルでは、古くから宇宙は9層の天からでき、人類は9種の人種があり、人間の言葉は9種であるという伝説がある。これに基づいて復元したと言う。
- 16) 祭祀の内容については文献11で論じた。
- 17) 現在3鎮、8ソムを管轄し、大規模な国营農場も有し、牧畜が主な産業である。総面積は10,182平方キロ、人口は約8.3万人（2007年）で、漢族の数が6割、モンゴル人が4割弱を

占める。

参考文献

- 1) 楊海英『チンギス・ハーン祭祀—試みとしての歴史人類学的再構成—』風響社, 2004 年
- 2) Erkesečen 『Čayan sülde kiged tegün-ü da γ agsad』(白いスウルデとその祭祀者) 内モンゴル文化出版社, 2005 年
- 3) 查格德尔『蒙古帝国揭秘—遗失的查干苏力德』《北国纪事》第四期。http://www.people.com.cn/GB/14641/28140/39805/39807/2937866.html 2004 年 10 月 22 日
- 4) 山下 晋司「観光人類学」綾部恒雄(編)『文化人類学最新術語 100』, 弘文堂, 48-49 頁, 2002 年
- 5) 山下晋司『観光人類学の挑戦「新しい地球」の生き方』講談社, 2009 年
- 6) ギアツ, クリフォード 吉田禎吾ほか訳『文化の解釈学』岩波書店, 1987 年
- 7) グレイザー, ネイサン, ダニエル・P. モイニハン著(阿部齊, 飯野正子共訳)『人種のるつぼを越えて: 多民族社会アメリカ』南雲堂, 1986 年
- 8) ホブズボウム, エリック, レンジャー, テレンス編集 前川啓治, 梶原景昭ほか訳, 『創られた伝統』紀伊国屋書店, 1992 年
- 9) Eldengtei & Ardajab “Mongγol-un niγuča tobčiyān seyiregölül tayilburi” (モンゴル秘史) 内蒙古教育出版社, 1986 年
- 10) Sainjirγal “Čayan sülde kiged tegün-ü tayilγa” (白いスウルデ及びその祭祀)『内蒙古社会科学』(蒙古版) 6: 80-81, 1992 年
- 11) ソロンガ「中国内モンゴル自治区オルドス地方における「白いスウルデ」祭祀の「復活」をめぐるエスニシティ」『愛知県立大学大学院国際文化研究科論集』9: 191-208, 2008 年

Summary

The Transmission, Re-creation and Transplantation of “Tradition” — On the “Revival” of the “White Standard” Ceremony in the Inner Mongolian Autonomous Region —

SULONGGA

Doctoral Course of the Graduate School of International Studies, Aichi Prefectural University

In the Inner Mongolian Autonomous Region of China, traditional ceremonies known as “white standard ceremonies,” which symbolize the spirit of the old Mongol empire, are now performed at three different locations in three different styles.

The first of these three ceremonies uses actual traditional rituals which have been transmitted for almost 400 years in Ordos by a group of priests alleged to be the direct descendants of the royal soldiers of the Mongol empire. The second one is a new ceremony which was “re-created” in 2006 near the location of the first one, in Ordos, for tourism development in commemoration of the 800th anniversary of the founding of the Mongol empire. This colorful ceremony was created through the cooperation of a private entrepreneur and of a scholar who has investigated the original “white standard” rituals of the past. The third ceremony is the newest one, created in 2008 in Čaqar, where Ligdan qayan, the last qayan of the Mongol empire, had his palace. This ceremony was created by the Čaqar Mongols, who assert that Čaqar is the true center of the old Mongol empire, by “transplanting” parts of the actual traditional rituals from the first ceremony in Ordos. These three ceremonies all strongly assert their own legitimacy.

In the background of the revival and re-creation of ceremonies, there are issues of ethnic identity and economic profit. Both of the new ceremonies, which have been revived for purposes of economic profit by way of tourism, at the same time activate the ethnic identity of the Mongolian People, which has a duality centered on Ordos and Čaqar. The Chinese government promotes tourism, but also seeks to control excessive activation of ethnic identity, and this fact influences both ethnic identity and activities relating to the revival of ceremonies.

Keywords: tradition, revival, Re-creation, Transplantation, Mongol identity, tourism, development